

ISSN 2186 – 3989

初年次演習科目における教員と学生アシスタント
(SA) の協働に関する実践
—1 年次「基礎ゼミナール」の事例—

斎藤 英明、篠原 史成、田部田 晋

Practices of Collaboration between Faculty and Student Assistant (SA)
in First-Year Seminar Courses

Hideaki Saito, Fuminari Shinohara and Shin Tabeta

北 陸 大 学 紀 要
第58号(2025年3月)抜刷

初年次演習科目における教員と学生アシスタント (SA) の協働に関する実践

—1 年次「基礎ゼミナール」の事例—

斎藤 英明*、篠原 史成*、田部田 晋*

Practices of Collaboration between Faculty and Student Assistant (SA)
in First-Year Seminar Courses

Hideaki Saito*, Fuminari Shinohara* and Shin Tabeta*

Received March 1, 2025

Accepted March 2, 2025

抄録

大学教育において、初年次教育は学生の大学生活のスタートという点に鑑みて重要である。北陸大学経済経営学部では 1 年生必修科目として基礎ゼミナールを配置し、複数のクラスに分かれ、担当教員が共通教材を使用して授業を展開している。本科目の特徴は教員に加えて学生アシスタント (Student Assistant, SA) がクラスごとに 1~2 名配属されていることである。複数の教員そして SA が担当するため、教材作成とクラスでの役割分担が授業の展開には重要となる。しかし、教材作成に対する意見交換や質疑応答、授業での教員と SA の役割分担は必ずしも十分に行われてこなかったと感じられる。そのため、クラス間での授業の密度や SA の授業での立ち居振る舞いに関して足並みが揃っていない場面が散見された。クラス間での足並みの乱れは最終的に受講生である 1 年生の学習成果に影響を与えるとともに、SA の意欲低下や次年度 SA の応募者不足へとつながると懸念される。

こうした状況に鑑みて、今年度はコマシラバスの早期共有、教員と SA の授業での役割分担の明確化、インフォーマルな形での情報共有の活性化という点で改善を行った。これらはすべて教員と SA の協働性を向上させ、SA の意欲や主体性の喚起を期待したものである。今年度の実践は教員 SA の双方に好影響を与えたと思われる。特に、SA に関しては 1 年生の先輩や教員の補助という枠を超え、授業設計に対して積極的に意見を発出し、授業の振り返りでは自身の行動を客観的に振り返る様子が見られるようになった。他方で、少なからず両者に対する負担が増加したため、次年度に向けて新たな課題も見られるようになった。

キーワード：初年次教育、基礎ゼミナール、学生アシスタント

* 北陸大学経済経営学部 Faculty of Economics and Management, Hokuriku University

*責任著者 斎藤英明 Hideaki Saito hi-saito@hokuriku-u.ac.jp

はじめに

北陸大学経済経営学部 1 年生必修科目の基礎ゼミナールは初年次教育として重要な科目である。本科目での学習を通じて本学が掲げる主体性・協働性・多様性を身につけ、2 年生以降の学びにつなげていくことが期待されている。本科目では教員は学生アシスタント（Student Assistant、SA）とともにクラス運営を行っている。SA は教育者としての側面と 1 年生の先輩という側面の両面を持ち、授業の円滑な進行、1 年生の成長促進のためには欠かすことのできない存在である。

本稿は基礎ゼミナール SA としてこれまで散見された諸課題に対して今年度どのような改善を実践してきたかという点について述べるとともに、その結果、どのような影響が見られたかという点について述べる。本稿は次のように構成される。まず、次節で北陸大学経済経営学部基礎ゼミナールの特徴と課題について述べる。続いて今年度実践した改善、得られた影響、そして次年度に残された課題の順で述べる。

基礎ゼミナールの特徴および課題

基礎ゼミナールは北陸大学経済経営学部 1 年次に通年科目として配置されている。当該科目は演習科目であり、受講生同士のグループワークを中心とした科目である。そして、複数の教員が共通の教材を使用して授業を行い、それぞれのクラスには教員 1 名と 1～2 名の学生アシスタント（Student Assistant、SA）が配置されている。1 クラスは約 20 名であり、SA は過去に同科目を履修した在学する 2 年生～4 年生の学生である。SA は教員が行う授業のアシストをする教育者としての側面とともに、年齢の近い先輩として振る舞う側面が期待されている。例えば、グループワークの円滑化を促したり、授業内容をよりかみ砕いて 1 年生に伝えたりする役割などが期待されている。同時に SA 自身も活動を通じて他者に伝える難しさや、適切な伝え方などを学び、自身の成長につなげることも期待されている。

基礎ゼミナールは同日、次時限に行われるキャリアデザイン 1（前期）もしくはキャリアデザイン 2（後期）の授業終了後、担当教員と SA が一堂に会し当日の授業について振り返りを毎週行っている。キャリアデザインは授業時間が 45 分の 1 単位科目であり、SA も引き続き出席をしている。振り返りはキャリアデザイン後の 45 分を利用して行われ、授業の進捗状況やクラスの様子等について情報の共有を行い、自分のクラスが持つ課題の解決方法の糸口を探す一助となっている。進捗状況など情報共有を行った後、次回授業の予告が次回担当教員から行われ、質疑応答が行われる。基礎ゼミナールは複数クラスが同時開講されるため、クラス間での進捗や理解度のバラつきは望ましくない。また、クラス分けは機械的に行われるため、教員間での授業への熱量に差が生じることも望ましくない。そうした差を極力小さくするためにもコマシラバスは重要である。コマシラバスには当日授業の目的・到達目標や 90 分間のおおまかな流れ、そこでの教員および SA の役割が記載されている。これにより 1 年生がどのクラスに所属しても同じ学習効果が得られるような仕組みとなっている。

ところが、昨年度までのコマシラバスは①コマシラバス共有のタイミング、②教員と SA の役割分担の点で課題を抱えていた。

まず、コマシラバス共有のタイミングである。昨年度までは全体への共有のタイミングが統一されておらず、授業内容の把握に関して十分な意見交換や質疑応答が行われてこな

かった。次にコマシラバスでの教員と SA の役割分担の記載である。この 2 点に関して今年度より改善を行い、より学習効果が高まるような授業設計・クラス運営を行った。

今年度の改善

昨年度までの状況を踏まえ、今年度は①コマシラバスの早期共有、②コマシラバスでの教員 SA の役割分担の明確化、③振り返り以外での情報共有の実施の視点から改善を図った。

昨年度までコマシラバスの全体への共有のタイミングが統一されてこなかった。タイミングは担当者に依存し、遅い場合、授業前日ということもあった。そのため、全体として意見交換や質疑応答はもとより、クラスごとの教員と SA との間で進め方についてすり合わせを行う時間も十分に取れていなかった。クラスごとの指導にバラツキがあったと感じられていた（図 1）。

今年度は共有のタイミングを前週の振り返り時に統一し、授業振り返りのタイミングで今回の内容把握、意見交換や質疑応答の時間を設けた。今週の授業が終わったタイミングで次回授業の内容が告知されるため、担当クラスで実施した場合の難易度や内容が適切か否か、よりイメージしやすくなった。主観的なものではあるが、コマシラバスに対して忌憚のない意見交換ができるようになったと感じている。表出された意見や疑問を受け担当者はコマシラバスの修正を行い、完成版としてあらためてコマシラバスの共有を行うようにした。この試みにより昨年度よりクラス間での足並みをそろえられるようになったと感じている。また、全体の場で共有することにより、教員だけでなく SA からもコマシラバスについて意見や質問が発出されるようになった。早期共有により SA の意識に変化を促せたと思われる。

次にコマシラバスでの役割分担の明確化である。昨年度までは教員 SA の役割分担は明確に分かれておらず、成績評価方法など教員にしか担えない部分を除き、「教員 SA どちらが担当してもよい」という形で記載されることが多かった。そのため、SA が主として授業を行うクラスから 1 年生にアドバイスをを行うだけのクラスまで、役割がまちまちであった。弊害として、SA 自身が存在理由に悩み、モチベーションの低下や成長機会の喪失からフラストレーションが溜まってしまうこともあった。また、役割が不明確な状態で授業に臨んだ結果、振り返り時に SA が授業を振り返ることができず感想の域を出ないこともしばしば見られた。これらはすべて 1 年生の学習に影響が出てしまう。コマシラバスの共有によってクラス間での差異が生じないように企図された基礎ゼミナールが、教員 SA の立ち居振る舞いの違いによって差異を生じさせるという本末転倒な状態が危惧されていた。

今年度は役割分担に関して、図 2 のように教員の役割と SA の役割を分けて記載し、授業の中で SA が主として授業を担う部分を設けた。役割を分けての記載は、先に述べたように、クラス間で SA の立ち居振る舞いに差異が生じることを防ぐと同時に、SA に授業担当者であるという認識を持たせる効果も期待したものである（図 3）。併せて SA がコマシラバスを深く読み込むことも期待された。役割分担の明確化は期待通り SA の意識に変化を促したと感じている。SA は一部であれ主として授業を担当したことで他者に伝えることの難しさを感じ、授業に臨む姿勢に適度な緊張感が見られるようになった。また、振り返りにおいて自分の伝え方が適切であったか否か、教員に質問する姿勢も一部の SA から見られことは、期待していた以上の効果であったと思われる。

最後に、授業後の振り返りに加えてそれ以外にも授業内容等について意見交換をする機会を活性化させた。これは教員のみ、SA のみに分かれ、北陸大学高等教育推進センターの協力を仰ぎながら実施した（図 4）。教員に関しては 2022 年度より当時の新任教員が互い

の授業への不安の解消、授業内容の疑問点の解消を目的として開始された。当初はコマシラバスの解釈が中心であったが、回数を重ねるにつれて内容のみならずクラスや学生の様子など、より踏み込んだ内容に話題がおよんだ。年度が変わり新任教員の着任など基礎ゼミナールの担当者が変わっても継続され、新任教員の不安解消や教員間でのチームビルディングに一役買っている。他方で、SA に関しては主としてユニット（単元）が終了するたびに SA と高等教育推進センターのセンター員のみで実施した。教員を同席させないことで SA が感じた感想や改善すべき点を率直に吐露することを期待している。SA からの意見は KPT 法でまとめられ、高等教育推進センターから基礎ゼミナールのとりまとめ教員に報告された。ユニットが進み、SA 自身が業務に慣れてくるにつれ、1 年生の様子のみならずユニットやコマシラバスの難易度や SA としての振る舞いの提案など、教員に対する要望のようなものも増えていった。SA のみの情報共有の場を設けることで意欲の向上など期待された以上の変容を促せたと感じている。

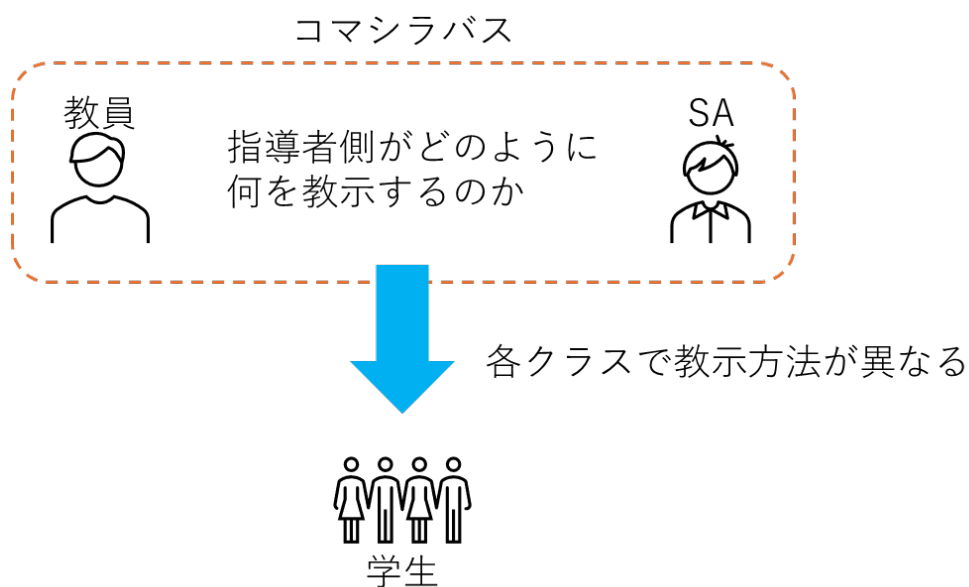


図 1 昨年度までの課題

時間	内容	教員の役割	SA の役割
5 分	1. 出席登録 カードリーダーを使用して出席登録をする。	教員は出席カードも用意し、学生証を忘れた学生に配布・回収する。	
5 分	2. イントロダクション 「第 1 回授業資料.pdf」を使用して、今回の授業概要を説明する。	今回は教員が行う。	
5 分	3. Teams への参加 - チームへの参加 - 通知の受信確認	- スクリーンにチームコードを表示する。 - 机間巡視を行い、受講生が参加できているか確認する。 - なんでもいいので投稿して通知が確実に来ているか確認させる。	机間巡視を行い、受講生が参加できているか確認する。

図 2 コマシラバスでの役割分担の明確化

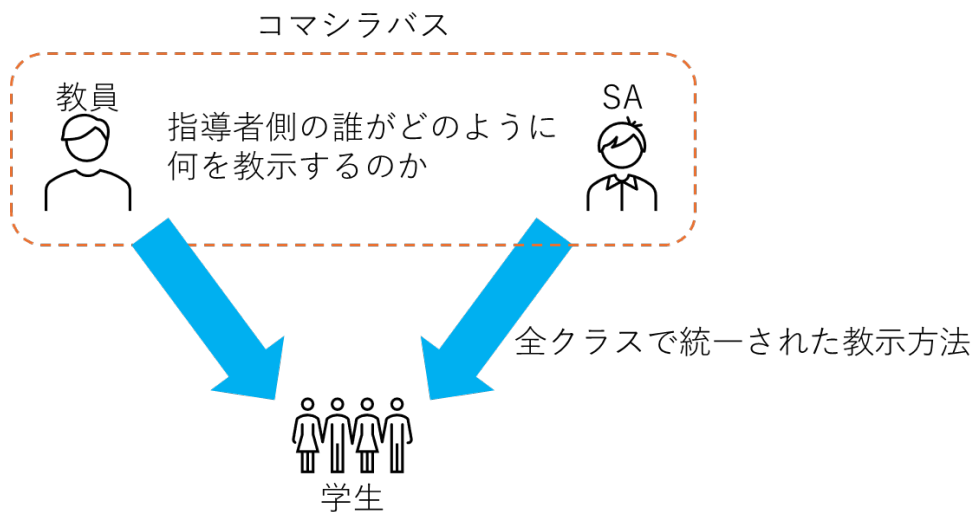


図 3 教員 SA の役割分担の明確化

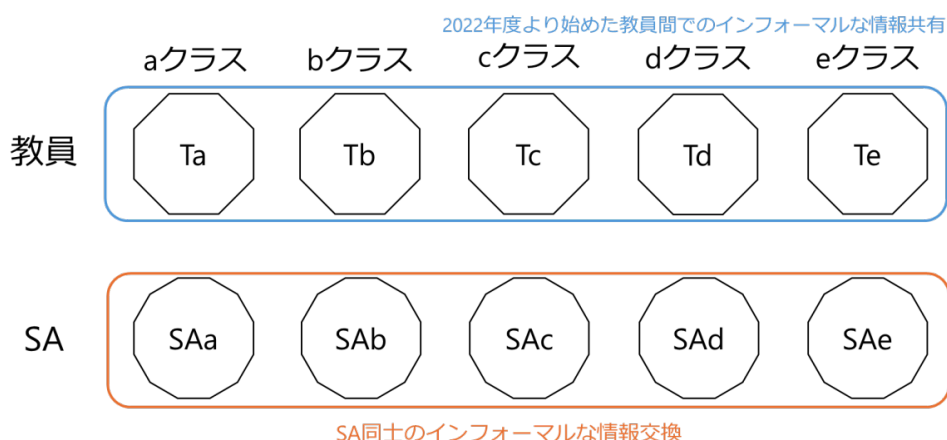


図 4 振り返り以外での情報共有

改善による変化

これらの実践により、定量化はされていないが昨年度に比べて教員・SAともに変化が見られたと感じている。コマシラバスの早期共有により授業のイメージを持ちやすくなり、準備時間を長くとることができるようになった。SAの役割の明確化は、SAの主体性、活動への意欲の向上を促せたと感じている。昨年度までは、とすると1年生の先輩という姿勢にとどまり、授業では教員の補助の域をでないSAも見られた。しかし、今年度は教員のように振る舞い、教員とともに1年生の成長方法に頭を悩ませる様子や、教員が気づかないようなクラスの観察が見られた。1年生を指導するという側面が感じられるようになったといえよう。

SAの教育的側面での変化は教員側にも好影響を与えたと思われる。直接的には教員の授業負担軽減であろう。決して教員が楽をできるようになったという意味ではなく、SAとの協働性の向上によりクラス全体を俯瞰することに注力できるようになった。先に述べたように、基礎ゼミナールのクラスは一定の条件はあるものの機械的に割り振られる。したがって、1年生の特徴も千差万別であり、大学に慣れるのに時間がかかる学生やクラスの学生とコミュニケーションをとるのが得意な学生、苦手な学生などさまざまな学生が混在している。特に出席状況が芳しくない学生や課題未提出率が高い学生は将来的に退学につながりやすい傾向にある。そういった学生をいち早く見つけ、手遅れになる前に声がけなど予防的措置をとることで退学率を抑制できると思われる。SAが授業の一部を担い、教員と同じようにクラス運営に参加することで、そうしたことを能動的に行えるようになったと思われ、授業後の振り返りにおいても各クラスの長期欠席者数が昨年度に比較して体感で減じていると感じた。もちろん、今年度の退学率が偶然低いということもありうるため、この点については次年度以降も継続して観察する必要がある。

同様に、教員が授業設計に集中することができるようになった。繰り返しになるが、基礎ゼミナールは複数教員が共通の教材を使用して授業を行っている。すべてのクラスで同水準の授業を提供するためにはコマシラバスの質が重要になる。SAが積極的に授業に対して意見や提案を行うようになったことで、教員はより充実したコマシラバスの作成・意見の反映ができるようになった。特に、SAの役割をコマシラバスに明記するようになった。

たことで、教員は1年生のみならずSAの動きもイメージしながらコマシラバスを作成するようになったといえる。教員にとっては多少負担が大きくなったと言えなくもないが、授業の充実の観点からは必要なプレッシャーであると思われる。

最後にSAの変化は1年生にも影響を与えた。次年度SAは年度内12月～1月にかけて応募、採用のプロセスをとっている。主な想定される候補者は基礎ゼミナールを受けている1年生であるため、「次年度SAとして活動してみたい」と思わせることも重要である。誤解を恐れずにいえば、「格好良いSA」の姿を見せることが重要な点となる。今年度は最終的に募集を上回る応募があった。1年生があこがれるSAの姿を印象付けられたと推察される。

おわりに一次年度に向けての課題

今年度実践した改善によりSAの意欲向上、教員間の情報共有の充実、なにより1年生の退学率抑止など基礎ゼミナール全体に好影響が現れたと思われる。他方で課題もいくつか発出しているように思われる。

まず、今年度SAが得られた経験の継承をいかにするかという点が挙げられる。すなわち、継続率の向上である。SAは2年生以上の学生から応募者を募り、面接を経たのち1年契約という形で採用される。SA自身の授業履修と並行しており、特に2年生では必修科目、履修指定科目など履修しなければならない科目も多くある。これらに加えて基礎ゼミナールのSAをするとすると、授業前後での打ち合わせ、振り返りも含め負担は相応に大きくなる。そのため、継続する学生が少なく、経験の蓄積が課題であった。また、応募者が少なかった昨年度までは、教員から個別にお願いをする形となることもあった。今年度は応募者が増えたが、次年度以降もSAをしたいと思える学生を増やすことが重要であると同時に、継続する学生を増やすことが重要である。採用者は北陸大学高等教育推進センターによるSA研修などを通してSAとしての心構えや立ち居振る舞いを伝えているが、SA同士での経験の継承も学生同士の感覚の共有という点で重要となろう。1年間SAとして活動した学生が活動を振り返り、自身の成長と反省を次年度のSAとして活かせるよう働きかける必要がある。SA経験者と初年度のSA同士の先輩後輩関係での意識共有が継続的に蓄積されるようになれば、SA文化と呼べるような体制が構築でき、一層教員は授業設計の充実に注力できるようになろう。やや誇張した表現を用いれば、初年次教育が充実したものと期待できる。

同様に、SA同士での意見交換の場を数多く提供する必要がある。先に述べた通り、教員同士のインフォーマルな形での意見共有は互いに声を掛け合い、繰り返し行われている。他方でSA同士となると履修状況やアルバイトなどによって時間を作るのが教員以上に困難である。今年度はユニット終了というタイミングでのSAのみの振り返りを基本に、距離感の近いSA同士での話し合いは散見されたが、気兼ねなくSAが集まれるような物理的な場は提供されていない。SA間で足並みをそろえることや時にはクラス運営での悩みの吐露は、SA活動を向上させる一助となると期待できよう。SAにかかる負担が過度になり過ぎないように配慮しつつ、授業の質的向上が得られるような仕組みを考えねばならない。

教員に関してはコマシラバス作成時での負担への配慮を考えなければならない。今年度は授業の1週前にコマシラバスの共有を求めた。さらに、共有後の意見交換を反映させるため1回の授業に都合2回コマシラバスを作成することになる。教員は基礎ゼミナール以外にも授業を担当して、言わずもがな大学内外での研究活動も行っている。したがって、

基礎ゼミナールのみに時間を割くことは難しく、理念としては共有できたとしても実際に遂行することが困難となることが懸念される。教員に対しても SA に対しても過度なプレッシャーとならないような設計、方針の打ち出しが次年度に向けて大きな課題と感じている。

参考文献

- 日下恭輔・板倉栄一郎・川端健司・丸山洋三・斎藤英明・篠原史成・高山直・田部田晋・竹川充（2023）「初年次演習科目における教員と学生アシスタント（SA）の情報共有に関する実践北陸大学経済経営学部「基礎ゼミナール」の事例」『2023 年度大学教育学会課題研究集会』金沢.
- 斎藤英明・丸山洋三・田部田晋・篠原史成（2024）「初年次演習科目における教員と学生アシスタント（SA）の協働に関する実践 北陸大学経済経営学部「基礎ゼミナール」の事例」『2024 年度大学教育学会課題研究集会』新潟.
- 杉森公一・田尻慎太郎・宮本知加子・三浦真琴（2020）「アクティブラーニングを支援する学生アドバイザー制度・研修・効果に関する実践枠組みの検討」『大学教育学会誌』41（2）、95-99.